

作業療法士が実感している訪問リハビリテーションの介入効果

らぼーる新潟 ゆきよしクリニック
作業療法士 大越 満

【はじめに】

作業療法士（Occupational Therapist：以下、OT）が実感している訪問リハビリテーション（以下、訪問リハ）の介入効果を明らかにするため、訪問リハの実践において、回答者の OT がこれまでにとてもうまくいったと感じている一人のクライアントについて回答を得た。

【方法】

1. **対象**：日本作業療法士協会が示している領域分類コードのうち、勤務先を訪問看護ステーションとして登録している OT148 名全員と、訪問看護ステーションに所属し 2003 年から過去 3 年間に日本作業療法学会で演題発表をし、前述の 148 名と重複しない OT5 名と合わせて 153 名を対象にした。

2. **調査方法**：対象者全員に、筆者が作成した自己記入式のアンケート用紙及び返信用封筒を 2003 年 8 月 25 日に郵送し約 4 週間後に礼状兼催促状を送った。回収期間は約 2 ヶ月であった。

【結果】

OT が実感している訪問リハの介入効果

回答者 58 名のうち、介入効果があったクライアントについて情報提供があったのは 53 名（91.4%）であった。さらに、OT53 名のうち、うまくいったと感じているクライアントへの介入内容とその介入効果が明確に回答されている 43 名（74.1%）を有効回答とし、分析対象とした。

（1）クライアントの属性

1) **性別**：OT が訪問リハを実践しうまくいったと感じているクライアントの性別は、男性 28 名（65.1%）、女性 15 名（34.9%）であった。2) **年齢**：クライアントの年齢は、70 代以降が、合わせて過半数（60.5%）を越えていた。3) **疾患名**：クライアントの主疾患は、脳血管障害 28 名（52.8%）が最も多く過半数を越えていた。4) **発症もしくは受傷からの期間**：最も多かったのは、3～6 ヶ月、11 名（25.6%）で、次いで 24 ヶ月以上の 7 名（16.3%）であった。

（2）クライアントへの介入効果

介入の効果はのべ 116 件 11 項目に分類できた。最も多かったのは「移動・歩行・移乗・立ち上がり」32 件で、次いで「起居・座位」17 件、「ADL・コミュニケーション」16 件であった。

【考察】

訪問リハを利用するクライアントの要介護度は高い傾向にあり、まず在宅でクライアントを寝たきり状態から脱却させることが介入目標となりやすい。すなわち、ベッド上の寝返り、起き上がりから立ち上がりへと一連の起居動作の向上が望まれるクライアントが多いといえる。

OT の視点として「移動・歩行・移乗・立ち上がり」、「起居・座位」を作業の一つとして捉えた場合、これらの項目は、身の回りのことを自分で行う「セルフケア」に該当している。作業は「セルフケア」の他に、社会的、経済的活動に貢献する「生産活動」、生活を楽しむ「レジャー」の 3 項目を合わせて作業として定義されることが多い。OT はクライアントにとって意味のある重要な作業を明らかにし、その作業ができるようにするために協業して作業療法を進めることを専門性と考えれば、今後、クライアントの「セルフケア」のみならず、「生産活動」や「レジャー」についても介入し、クライアントに介入効果を示していくことが今後更に重要であると考えられる。